

■今月のメッセージ (2011年6月)

日本銀行富山事務所長
水上 誠一

今回の大震災により、過去を忘れないこと、学習することの大切さ、またその難しさ、簡単に理解することの恐ろしさを実感させられました。

震災後に、ある新聞のコラムで取り上げられていた寺田寅彦先生の「津浪と人間」を読み、正直ドキリとしました（読んだ方は以下不要です）。これは昭和8年、37年振りに起きた三陸沿岸大津波について書かれた文章で、その中で寺田先生は、「度々繰り返される自然現象ならば、(中略)災害を未然に防ぐことが出来ていてもよさそうに思われる(中略)が、それが実際なかなかそうならないというのがこの人間界の人的自然現象であるように見える。」

「津浪に懲りて、はじめは高い処だけに住居を移していても、五年たち、十年たち、十五年二十年とたつ間には、やはりいつともなく低い処を求めて人口は移って行くであろう。そうして運命の一万数千日の終りの日が忍びやかに近づくのである。」として、災害後の詳細な調査と予防案の発表・実行、関連法令による対策、災害記念碑も、学者・役人・住民の世代が代われば、「無事な一万何千日間の生活に甚だ不便なものである場合は猶更」意味をなさない。勿論、碩学の寺田先生とて妙案はなく、「残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう。」「普通教育で、もっと立入った地震津浪の知識を授ける必要がある。」としています。

過去を忘れないと同時に、目前で起きていることを理解するための学習も不可欠です。ある高校の施設見学会の記録で、「今までメディアで伝えられる一面的な情報だけで考えていたが、見学してみて、改めて正しい知識を持つことが必要だと感じた。」という感想を読みました。しかし、毎日夥しい情報が流れる中で、一体「正しい知識」とは何か、「科学的事実」と「想定」との関係はどうなのか、「主観」と「客観」はどうやって見分ければいいのか、等々、悩みは増すばかりです。同時に、これはもうお手軽に理解してはいけないのだ、ずっと考え、意見を出し合い続けなければいけないのだ、と思わざるを得ません（因みに、寺田先生は「万人がきれいに忘れがち」と指摘してますが...）。

寺田先生はまた、別の著書で、「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならないはずであるのに、それがいっこうにできていないのはどういうわけであるか。」「(天災と国防)」と言い切っています。世の中に溢れるのは、「人間は自然災害を克服し、文明を発展させてきた」という表現ばかり。今日一つ便利になった分、それが崩壊したとき何が起きるのか、と自問自答するのが正しい生き方なのかもしれません。

「津浪と人間」は実に優れた人間観察でもあるので、是非教科書に採用すべきです。もっとも、毎回「忘れた頃に」寺田先生が話題になること自体に問題がありそうですね。